短編集

雨宮　固依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短編集

【Ｎコード】
Ｎ６３４８Ｘ

【作者名】
雨宮　固依

【あらすじ】
思いついた短編を載せてます。
ジャンルはいろいろ。

かくして、鴉は笑ふ

夜の帳が辺りを薄闇に包む。
竹と竹の間から沈みかけの夕陽が、そこを駆ける少年を朱に染める。
「だめだよ。逃げちゃいやだよ」
その少年を追いかけるように、一人の少女も走る。
二人とも、年の頃は十三、四ぐらいだろうか。
少年と違い少女は紅い着物に紅い鼻緒の下駄姿の出で立ちだ。
切りそろえられた、濡れたような黒髪を振り乱し、少女は追い掛ける。
「待ってよ。私を置いていかないで」
少年は振り返らない。
ただ前へと急ぐ。

少年はただ駆けながら、昨日の話を反芻する。

「隣町のちぃちゃん、亡くなったらしいわよ」
母が櫃を持ってきながら言った。
「ふぅん。俺と同い年だったっけ？」
「あんた、忘れたの？昔はよく遊んでたじゃない」
「そうだっけ」
興味はそれぐらいしかなかった。
母もそれ以上は何も言わなかった。
仮に覚えていたとしても、昔の事だ。
顔も忘れているに違いない。
現に、その「ちぃちゃん」とやらの存在自体、覚えていない。
結局はそれほどの重みもないものなのだ。
しかし、夕食時に人の生死の話をするのはよくない。
そのせいか、夕食がいつもよりも少し質素に感じたのは、きっと気

のせいだろう。

「ちょっとおばちゃんの様子を見てきて」

「様子を見てきて」ということは、食事を持っていけ、ということなのだろう。

行きがけに土間に立ち寄ると、案の定食事が用意されていた。

「あんまり長居するんじゃないよ」

母に念を押され、勝手口から庭へ出た。

同じ敷地内の離れに、祖母は住んでいる。

正確には、そこで生きている。

生活らしい生活はしていない。

病気なのだ。

母は祖母を嫌い、祖母は母を嫌う。

その間を取り持つのが役目だ。

そこには何の感慨もない。

嫌いでもない代わりに、好きでもない。

母に対しても、祖母に対しても。

ただ単なる仕事としてでしか、捉えていない。

「入ります」

「いつも、ありがとうねぇ」

床に伏せっ切りの祖母の枕元に、食事を置く。

土気色をした顔に、枯れ木のような腕。

これが人としての最終形態かと思うと、空しく感じた。

「では、後で取りにきます」

離れを出ようとしたときだった。

「明日は外に出ない方がいい。悪いもんがつくよ」

祖母が呟いた。

母が、実の親の祖母を嫌う理由はここにある。

たまにおかしな発言をするのだ。

そしてたいていの場合は、当たる。
「そうですか。気をつけます」
しかし、気にはかけなかった。
祖母の発言が、この身に降りかかったことは一度もない。
自身を、祖母を軽んじていた。
そして、つけが今に回ってきた。

少年は追いかけてくる少女に微かな見覚えがあった。
記憶の奥底に閉じ込められていたような錯覚を催し、思い出す。
「ちぃちゃん」だ。
陶器のような白い肌。
闇夜のように黒い髪。
朱の刷けたような唇。
どれも、なぜ忘れていたのか不思議なほど、ありありと目に浮かぶ。
しかし、その「ちぃちゃん」は昨日死んだはずだ。
たまたま訪れた隣町で「ちぃちゃん」の葬儀があったのを、少年はたまたま目にしていた。
「ねぇ、どうして？私はここにいるよ？」
記憶の声が聞こえる。
これは幻覚だ、幻だ。
歯を食いしばり、正面を見据えた。
やった、間に合った。
目の前には、古びた朱の鳥居。
神社の境内に入りさえすれば。
辺りに若干の違和感を感じながらも、足を一歩踏み入れ、立ち止った。
膝に手をつき、息を整える。
後ろからの足音も聞こえない。
影が細長く伸びている。
すこし冷たい風が吹き抜ける。

そろそろ帰らないとまずいか。
少年は後ろを向いた。
「やっと、こっちをむいてくれたね」
境内の中に、少年の真後ろに、「ちぃちゃん」はいた。
「ど、どう・・・して・・・」
「こっちを向いてくれないのが、悪いんだからね」
「ちぃちゃん」の白い手を夕陽が、血が、紅く染め上げる。
その手が少年の頬に触れた。
「やっと会えたんだから、離さないよ」
少年は目の端に、しめ縄が張り巡らされていない鳥居を捉えた。
誰もいない境内に、一羽の鴉が一声、鳴いた。

ありきたりじゃない君へ

「私と世界、どっちの比重が大きい？」
振り向いた君は、大きな瞳をしている。
闇のように深くて、吸い込まれそうだ。
「世界、って言ったら、どうする？」
俺は君の瞳を見ない。
なぜなら。
見てしまったら、嘘がつけなくなるから。
「グローバルな男だね、っていう」
くるくる回りながら、君の髪は放射状に広がる。
まっすぐでも、くるくるでもない君の髪。
自然なその感じがいい、というと、君はいつも怒るけど。
「なんとも曖昧な」
俺が呟くと、
「そんなん、知ってるでしょー」
俺に向かい合うようにして止まった。
「だったらさ、」
俺は君の黒い瞳を見る。
「君、って言ったら？」
また、くるくると回りだした。
本当によく目が回らない、と感心するよ。
「重いなー、もっと楽に生きよう、っていう」
そう思うなら、聞くなよ。
君は気づかないと思うけど、俺の本心はこれのはずなんだ。
たぶん、きっと。
「だったら、何が君の欲しかった答え？」
ありきたりじゃない君。
それは付き合った、いや、気になり始めた当初から知っていたこと

だ。
だけど、俺は答えを求めてしまう。
そうだ、俺は至ってありきたりな男であるが為に。
「グローバルかつ私を想ってる、って言ってほしいかな、なんてね」
君は無邪気に笑うけど、おいおい、最初の
「私と世界、どっちの比重が大きい？」
の答えになってないじゃないか。
俺は至って平凡であるが故に、二者択一の選択を迫られたら一つしか選べないんだ。
君みたいに、豊かな発想力とある意味の妄想力は、残念ながら持ち合わせてはない。
だけど、
それが君のいいところだ。
そして、俺も聞きたい。
「じゃあ、俺からも聞く。俺と世界、どっちの比重が大きい？」

君はどう答えるだろうか、俺には分からない。

雨の日の最後

「外に出てると、風邪ひくぞ」
「はあい」
外はまだ雨が降り続き、止む気配もない。
私は傘をさし、庭に出ていた。
広大な庭の隅の一本の桜の樹。
気持ちいいほどの大粒の雨が傘を、葉をたたく。
雨は嫌いではない、むしろ好きな方。
冬には珍しく、豪雨だ。
嵐と聞くと、胸が高鳴ってしょうがない。
「いつまでいるつもりだ、ほら、行くぞ」
「・・・はぁい」
彼は私の肩にタオルを掛け、家の方に向かって背中を押す。
その手のぬくもりに、体が冷えていた事を悟る。
激しい雨のせいか、地面の跳ね返りの雨が足元を濡らしていた。
歩きにくい。
泥がまとわりつき、裾がまとわりつく。
「はっ・・・くしゅん」
少しの間があいた後、彼は笑いだした。
「ほら、くしゃみしてるじゃないか」
心配そうな言葉はかけるものの、顔が笑っている。
「顔、笑ってる」
ああ、すまんすまん、と軽く頭は下げるものの、肩は震えているのが分かる。
決して、声には出さず、体を震わすように笑う。
「いつもながら豪快なくしゃみだな」
「逆に小さく抑えられる方がびっくりだよ」
「ま、それもそうか」

冷えたから、体、温めておけよ。
小声でそっと彼は囁いた。
その声はどこか、いたわるようで、心配そうで、さみしそうで。
私に気を使えるのも、これが最後だ、と分かっているからなのか、
それとも。
「ねえ、今日のお願い、聞いてくれる？」
「聞くだけならな」
「歩きにくいから、家まで連れて行って」
「重いのは嫌だ、それに、俺が濡れる」
うるさい、と私は彼の脇腹を小突く。
そのまましばらく歩くと、母屋が見え始めた。
縁側を、多くの人が走っているのが見える。
足が止まる。
それに合わせて、彼も足を止めて、私の顔を覗き込む。
どうした？
そう聞く、彼の声が、なぜだか胸に染みいる。
「運命、って決まってるのかな」
「さあな、決まってると思えば決まってるだろうし、思わないんなら、決まってないんじゃないの？」
「これも、運命なのかな」
「俺には分からない、分かるのは、姫だけ」
いつも、姫、と呼ぶのは嫌だと言っているのに、彼はいつまでも、
姫と私を呼ぶ。
でも、もう後数時間後には、もう、姫と言われない。
それだけで、なぜか胸がとてつもなく痛むようで。
頬に、温かいしずくが伝う。
なぜだか、涙を彼に見られるのは嫌だった。
自分が弱いようで、自分がいたたまれなくなる気がして。
私は傘を降ろす。
直に雨が顔に、頭に、髪の毛に降り注ぐ。

頬を伝う涙も、雨と一緒になれば、わからない。
浅はかな考えも、彼には通じなかったようで、
「何泣いてんだよ、今日は姫の晴れの日だろ」
彼の傘を私の上にさした。
くぐもった傘を打つ雨の音が、不甲斐ない私を笑うようだ。
「胸を張ればいいんだよ、いつもの姫みたいに」
優しく諭すように、でも、いつものような近さは感じない声音で、
彼は言う。
それが、現実を突き付けられているようで、胸を締め付ける。
ほら、時間だ。
またしても、優しく背中を押す手に力がこもる。
「・・・して、どうして、さみしくないの？私はさみしいのに、なんで平気そうなの？」
彼は、軽く笑っただけで何も返してこなかった。
それからも一向に口を開こうとせずに、淡々と歩く。
１０も年が離れていながら、対等に扱ってくれていたのは、私が雇い主の娘だったからだけなのか。
考えたくもない結末に行きついてしまうのは、今日が私の婚約日であり、彼がこの屋敷から、私から去ってしまう日だからなのか。
「私が雨が好きな理由、知ってる？」
「さあ」
「前に、あなたが、雨が好き、って言っていたから」
「安直だな」
「だから、」
「だから？」
これ以上は言えない。
こみ上げるものが、胸を押しつぶすようで、声にできない。
「姫もまだまだお子様だな、婚約するとか言いながら」
「これでも、もう２０なんだけど」
「俺がいなくなるのは、それが契約だからだ。それが俺の役目の終

わりであり、姫との関係の終わりだ」
それって、もうこれからは他人ってこと・・・？
そんなのは嫌だ。
「だけどな、そしたら、俺たちはまっさらな関係になれる。お子様じゃないならこの言葉の意味はわかるよな？」
私はただ頷くことしかできなかった。
「ならよし」
気づくと、もう母屋についていた。
優しく背中を押され、一歩を踏み出す。
振り向くと、彼は笑顔だった。
いいんだ、これで。
彼には何も求めてはいけない。
もう、他人なのだ、関係は一切ない。
だけど、最後くらい、笑っても、いいよね？

雨の日の最後（後書き）

３０分クオリティーです（汗）
時代は・・・適当に考えて頂ければ・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6348x/

短編集

2011年11月20日20時24分発行